帝京短期大学 紀要 No. 24：171－178，2023

教育・保育における「語彙力」に関する実践的研究
――「語彙力」の実態とその育成に向けて――

小林　賢司

帝京短期大学　こども教育学科

【抄録】

【目的】本研究は，幼稚園の教員や保育所の保育士を志す短大生（第 2 学年）の「語彙力」の実態を把握するとともに，単元「教育の方法と技術」の実践を通して，語彙力を育成する効果的な指導方法について究明するものである。なお，本研究では，「語彙力」とは，「語彙数」と「語彙を適切に使いこなす力」を併せ持つ意味として捉えた。また，文中における「言葉」と「語彙」の違いについては，単語として意味を持つ語を「言葉」とし，個々の言葉を数量的に表す場合に「語彙」とした。

【方法】学生が保有する「語彙数」の実態を把握するために，単元の初回時に「教育・保育について知っている言葉」の調査をした。また，「語彙力」の育成を助長する指導の手立てとして，単元の学習過程において，小テスト，小論文，レポートのほか，学習に対する自己評価を取り入れた。さらに，単元終了時には，提示した 28 個の言葉を使って課題作文を書かせるとともに，「単元終了時までに習得した語彙数」と「語彙数を増やした理由」について調査した。このほか，抽出した 6 名の学生の学習状況を集約し考察した。

【結果】調査対象とした学生は 26 名であり，単元の学習前に全員が保有する語彙数は 421 個で平均 16.2 個であった。また，単元終了時までに習得した語彙数については，21 名（81%）が「50 個から 80 個」の範囲に集中した。さらに，「語彙を増やした理由」では，「分からない言葉や専門的な言葉について調べた」など多様な回答が寄せられた。このほか，抽出した 6 名の学生の中から，変容等が顕著な 3 名の学習状況を分析・考察した。

【考察】単元の学習後に学生が習得した語彙数は，学習前と比較して 4 倍程度に増やしたが，その理由には，主に言葉や語彙に対する関心度や受容力などが起因すると推測され，特に学力との関係が最大要因であると決定づけることはできなかった。また，語彙数を増やし語彙力の育成を助長するには，単元の学習過程において，常に目的的・意欲的に学ばせたり，確かな理解を基に拡散的な思考を促したりするほか，随所で自己評価を取り入れるなどの指導の手立てを講じることが効果的であることが認められた。さらに，抽出した学生の学習状況からは，標準的な学力（関心・意欲・態度，理解力，思考力など）を身に付け，豊富な語彙を有している者は，総じて語彙力も高いことが明らかになった。

【キーワード】言葉，語彙，語彙数，語彙力，指導方法，自己評価，学力

Ⅰ．目的

本研究は，幼稚園の教員や保育所の保育士を志す学生の語彙力の実態を把握するとともに，一単元の授業実践を通して，学生の変容とその要因を考察する。さらに，「語彙力」の育成に向けた指導方法についてその効果を考察する。

Ⅱ．方法

1. 調査対象者

こども教育学科第 2 学年の受講生 26 名を調査対象とした。また，このうち抽出調査の対象として 6 名の学生を選定した。

2. 調査時期

令和 4 年 4 月 5 日から同年 7 月 19 日まで。

3. 調査内容

(1)「教育・保育に関する言葉」の調査

単元の学習の初回時において，現時点で知っている「教育・保育に関する言葉」を記述させた。

(2)「単元の終了時までに習得した語彙数」と「語彙数が増えた理由」の調査

①単元の終了時までに習得した言葉（語彙数）を，30 個未満から 101 個以上の範囲で 10 個ごとに区分した中から選択させた。

②「語彙数が増えた理由」について，実践してきたことを記述させた。

(3) 課題作文「あなたが考えるよりよい教育・保育の方法」を書く

言葉を適切に使いこなす語彙力と，問題に正対した作文力を評価する目的で，下記に示した 28 個の言葉を使い，「あなたが考えるよりよい教育・保育の方法」という題で作文を書かせた。なお，28 個全ての言葉を使わなくても，また，他の言葉を使ってもよいことにした。

個と集団　環境　指導・援助　個性　評価 学び　関わり　意欲（的）　主体（的）　保育 のねらい　計画　実践　評価　改善　再構成 経験　遊び　活動　5 領域　幼児の内面　園生 活　信頼関係　育ち　幼児期の終わりまでに 育てたい姿　発達　保育形態　表現　保育者

4. 倫理的配慮

(1) 調査の目的と個人情報の保護について

本調査は短大の教育研究に資するものであり，各人が回答した内容は個人情報として研究目的以外には使用しないことを周知し，学生の承諾を得た。

Ⅲ. 結果

1.「知っている言葉」の実態

(1)「知っている言葉」の保有数

単元の学習前の時点で，26 名の学生のうち保有数が最も少なかった者は 5 個で，最も多かった者は 28 個であった。その総数は 421 個で，平均すると 16.2 個であった。

(2)「知っている言葉」の中で多い言葉

「知っている言葉」の中で上位 5 位までを挙げると次のようになる。（　）の数字は人数を指す。

① フレーベル（15）
② 倉橋惣三（12）
③ 恩物，5 領域（各 8）
④ ルソー，森の幼稚園（各 7）
⑤ ペスタロッチ，環境（各 6）

2. 単元終了時までに習得した語彙数

単元終了時に学生が回答した語彙数は以下の通りである。

習得した語彙数	人　　数（%）
30 未満	1（3.8）
31 ～ 40	1（3.8）
41 ～ 50	4（15.4）
51 ～ 60	9（34.6）
61 ～ 70	8（30.8）
71 ～ 80	1（3.8）
81 ～ 90	1（3.8）
91 ～ 100	0
101 以上	1（3.8）

習得した語彙数は 41 から 70 個に集中しており，その割合は学生全体の 80.8% に当たる。

なお，本調査では 10 ごとに概数で選択させたので，直接比較することはできないが，学習前の一人当たりの平均（16.2 個）と見比べても，語彙数が 4 程度に増えたといえる。

3.「語彙数を増やした理由」の調査

「語彙数を増やした理由」として回答した者の中から上位 5 位までを挙げると次のようになる。（　）内の数字は人数を指す（内容が同じ趣旨のものを含む）。

① 授業後に分からない言葉や難しい言葉を書き取ったり調べたりした。(9)
② 意味の分かりにくい言葉や専門的な言葉は，教科書を見直したりインターネットなどで調べたりした。(8)
③ 難しくて覚えられない言葉は，予習したり復習したりして調べた。(4)
④ 覚えておきたい言葉や参考になる言葉は，日常生活の中で，同世代だけでなく，他世代や他性の人などにも使ってみた。(4)
⑤ 家族に話したりノートに書き出したりするなど，アウトプットするようにした。(3)

このほか，にも「本や新聞を読む」「さまざまなことに関心を持つ」「他科目と重ね合わす」「自分の考えを話したり書いたりできるようにする」

「テレビや新聞のニュースに関心を持つ」など，実に多様な取り組み方が見られた。

4. 抽出の基準と選定

まず，抽出の基準は単元の学習前に保有していた語彙数が 20 台の者を「A グループ」，10 台の者を「B グループ」，1 桁台の者を「C グループ」に分類した。

そして，各グループの中から，単元の学習の終了後に，語彙数や習得率が増加した者，課題作文の評価が高い者，小論文の評価が高い者，さらに，語彙数を増やした理由などを勘案して 6 名を抽出した。

(1) 抽出した学生の学習状況について（Table 1.）

語彙数について単元の学習前後で比較すると，どの学生も 3 倍以上増やしている。中でも，Cb が突出して高くなっている。

また，小テスト・小論文・特別課題（レポート）については，A グループの 2 名は小テストの成績はやや低いものの，それ以外は高得点をとっている。そして，B グループの 2 名も小テストの成績は低いが，特別課題の成績は A の 2 名と同様に高い。さらに，C グループの 2 名も小テストの成績は低いが，小論文と特別課題の成績はそれ程低いとは言えない。

さらに，「課題作文における使用語彙数」と「単元の学習前の語彙数」との関係で比較すると，A グループから順に B，C グループへと「学習前の語彙数」が少なくなっていることが分かる。

1）Aa・Ba・Cb の変容について

【Aa の変容】

Aa は向学心が高く活発な性格であり，授業にも意欲的に取り組んできた。また，Aa の語彙習得数は単元の学習前と比較して 3 倍を超えている。語彙数を増やした理由については，「授業を受けた後に分からないことを調べる。他の科目と重ね合わせ，意味を深く理解する。ノートを作成する。」と記している。授業の進行とともに語彙数を増やし，小テストの成績は必ずしも良好とはいえなかったが，小論文と特別課題では的確に要点をおさえた文章を書いた。また，課題作文では 23 個の言葉を使用したほか，新たに 8 つの言葉を付け加えて下記の作文を書いた。

> 幼児に対して「よりよい教育・保育」を行うためには，保育のねらいをはっきりさせておくことが大切だと思う。保育のねらいを考える上で 5 領域や幼児期の終わりまでに育てたい姿が育まれるような遊びを考えたり，園生活を送らせたりする必要がある。
>
> また，子どもたちが成長していくためには，子どもが友だちと関わり，さまざまなことを経験させる必要がある。
>
> 保育者はそのための指導・援助をしたり，子どもたちとの信頼関係を築いたりして，子どもの内面理解を深めることが大切である。そして，子どもを主体とした活動を考え，意欲的に取り組めるように，それぞれの個性をとらえた上で一人一人に合った声かけをすることが大切である。
>
> 保育者は 保育の計画を立て，実践し，自分の保育を評価し，改善したことを含め，再構成する。そして，さらにもう一度実践するという繰り返しをすることによって，よりよい保育に近づけるのではないかと考えた。

【Ba の変容】

Ba は明るく落ち着いた性格で，常に集中して授業に取り組んできた。Ba の語彙習得数は単元の学習前と比較して約 4 倍になっている。語彙数を増やした理由については，「出てきた言葉を調べて，そのまま写すのではなく，自分が理解できるような言葉に変換して語彙を増やした。調べても分からないときは，誰かに聞いたりする。」と記している。また，小テストの成績は必ずしも良好とはいえなかったが，着実に学習を積み重ね，小論文では満点を取り，特別課題もそれに近い成績であった。そして，課題作文ではこれまでの学習成果を生かし，19 個の言葉を使用して下記の作文を書いた。

> 幼児期の終わりまでに育てたい姿を基盤に，園生活や遊びの中で子どもが育つような環境を設定する。日々の保育のねらいや計画も大切だが，子どもをねらいや計画に合わせるのではなく，子ども主体に考えて，ねらいや計画を立てることがよりよい教育・保育の方法に繋がるのではないかと思う。
>
> また，子どもとの信頼関係を構築するためにも子どもとの関わりを大切にして個性を理解しながら指導・援助することで，子どもは思い切り自分を表現できるのではないかと考

える。
　そして，普段経験できないことを経験することで，子どもは様々なことを思うし，今後の遊びでもその経験を取り入れて遊ぶことで学びを深めることができると考える。したがって，保育者はこれらのことを考えながら活動にふさわしい保育形態を選び，実践，評価，改善していくことが大切であると考える。

【Cb の変容】

Cb は一見おとなしく控え目な性格に見えるが，発言や文章表現は明解で筋が通っている。Cb の語彙習得数は単元の学習前と比較して 8 倍に増えている。増やした理由として，「・両親や身近な人から聞く。・知らない言葉を調べる。・難しい語彙は何度も書く。・実際に日常の中で使ってみる。」としている。小テストは半分程度の出来であったが，小論文は見事に 2 度とも満点であった。個々の知識を覚えるより，自分の考えや主張を文章に表すことのほうが得意のようである。22 個の言葉を使用した下記の課題作文にもそうした面が窺える。

Table 1．抽出した学生の学習状況

抽出した学生	単元の学習前における語彙数	単元の学習後における語彙数（概数）	小テスト 2 回（各 50 点満点）	小論文 2 回（各 30 点満点）	特別課題 2 回（各 10 点満点	課題作文（10 点満点）※ 28 個中の使用語彙数	自己評価（4 回のうちの提出回数）	語彙数を増やした主な理由
Aa	24	80～90	① 32 ② 42	① 30 ② 28	10 10	10 ※23	4	・分からないことは授業後に調べる。 ・他の科目と重ね合わせて意味を深く理解する。
Ab	20	50～60	① 36 ② 38	① 30 ② 30	8 10	10 ※24	4	・授業で覚えられたかったものは後で調べる。 ・特別課題では自分で調べてまとめる。
Ba	17	60～70	① 31 ② 37	① 30 ② 30	8 10	10 ※19	4	・自分が理解できる言葉に変換する。 ・調べても分からないときは誰かに聞く。
Bb	13	40～50	① 23 ② 36	① 20 ② 15	7 8	8 ※13	4	・教科書や参考書をよく読む。 ・先生の話をよく聞く。 ・ニュースを見る。
Ca	9	40～50	① 29 ② 32	① 30 ② 25	7 10	8 ※15	4	・本や新聞，テレビなどのニュースに触れる。 ・異なる世代や他性の人と積極的に会話する。 ・「書く」「話す」などアウトプットをする。
Cb	8	60～70	① 22 ② 36	① 30 ② 30	7 6	9 ※22	2	・難しい語彙は，身近な人に聞いたり 調べたりする。 ・実際に日常の中で使ってみる。

（注）
・「単元の学習前における語彙数」は，本人が実際に筆記した数である。
・「単元の学習後における語彙数」は，本人が選択した概数である。
・「特別課題」は，学習内容の補充・深化を目的に課した課題である。
・「課題作文」の評価の観点は，「28 個の言葉から選択した言葉の適切な使い方」と「課題に正対している内容」である。

私が考える「幼児に対するよりよい教育・保育の方法」は，子ども一人一人の個性や特徴を捉えながら，園生活の中で友達同士あるいは，保育者と共に育ち合う環境作りである。保育のねらいや幼児期の終わりまでに育てたい姿をその通りに行うことも大切だが，まずは子どもたちが日々の生活の中で，意欲的に探究心を持って活動したり遊んだりすることが重要だと思う。そのためには，保育者がなるべく1対1，一人一人とスキンシップを取り，信頼関係を築きながら様々な場面で援助し，次は集団として一人（個）と皆（集団）で生活することの違いを学んでいくことが大事だと考える。

園での実践や友達や保育者との経験が間違いなく，子どもにとって，社会へ，人間の基礎的な人間力へとつながると思う。子どもたちにとって，大切な発達段階で自分を表現したり，主体的に行動したりすることへの恐怖心や羞恥心をこの幼児期のうちにできるだけ取り除いて，身体だけではなく，幼児の内面も成長できるような環境作りや関わりが大切で重要だと私は考える。子どもを認め，褒めて，伸ばすことのできる保育者となりたい。

Ⅳ．考察

1．学生の語彙力の実態

幼稚園の教員や保育所の保育士を志す者として，また，既に第1学年でも「教育・保育」に関する授業を受けてきているもかかわらず，単元の学習前における「知っている言葉」の数は想定以上に少なかった。

単元の終了後には平均して4倍程度に増やしたものの，習得した語彙数には明らかに個人差が見られた。それは「言葉」や「語彙」に対する関心度，必要感，向学心などに起因するものと考えられる。

また，「語彙数を増やした理由」については，単元の学習前における語彙数の多寡に関係なく，個々が自分なりに語彙を増やすために様々な取り組み方をしていることが分かった。

例えばCaは「異なる世代や他性の人と積極的に会話する。書く・話すなどアウトプットをする。」，また，Cbは「実際に日常の中で使ってみる。」，さらに，Abは「他の科目と重ね合わせて意味を深く理解する。」などと言っている。このほかにも多彩な取り組み方が見られたが，このことは，当面の追究課題と取り組むべき内容，方向性が明らかになれば，学生は自分に合った方法や得意な方法を駆使して対応していけることを如実に表していると言えよう。

2．語彙力の育成に向けて

(1) 効果的な指導方法について

指導方法として，単元の学習過程において，形成的評価を取り入れながら，小テスト，小論文，レポート，課題作文などの指導の手立てを講じたことは，教育・保育に関する専門的な語句への関心と理解を深めることに繋がった。

また，単元の学習が進むに連れて，学生が語彙及び語彙力の有用性や必要性に対する認識を徐々に高めていったことが，意欲的に学習に取り組む姿からその一端が垣間見られるようになった。

さらに，抽出した学生の学習状況からも窺えられるように，指導の手立てによる刺激的効果が学生の意識と行動に変化を与え，結果的に語彙を増やし，語彙力の育成にも繋がっていったものと推測される。

(2) 語彙力を育成する視点

本実践は一単元という短期間の中で集中的に取り組んだものであり，もとより，この一事例だけでは確たる結論を導くべくもない。

本格的に取り組むには，研究チームを組織するなどして，少なくとも1年間というスパンの中で，個人に焦点を当て，複数の単元を通して継続的・集中的・重点的に調査・観察していく必要がある。また，語彙力の習得にはそれなりに個人差が見られることから長期間にわたって個別的にその変容を追跡していくことが肝要である。このような意味でも，本実践は一つの「実践モデル」と言える。

なお，本研究において，その主眼であるはずの，個々の学生が獲得した「語彙力をどのような側面から測定し，それをどのように分析するか」という点に十分に取り組めなかったことは否めないと深く反省するところである。

(3) 学生自身による語彙力の育成

ある国語辞典によれば，「こだわり」の2つ目の意味として「細かな点にまで気を使って価値を追求すること」と記されている。

若い世代は新語（造語）を創ることには長けているが，その多くは日常の話し言葉が語源となっている。

今後，学生が社会に出て，改まった場で話したり，保護者向けの印刷物を書いたりするような際に，語彙力の優劣は，単に会話力や文章力などに止まらず，ひいては，その人の教養の深さや職能にまで影響することさえある。

本実践を通して，学生は自分なりに言葉に対する「こだわり」を持ちながら，一つ一つの言葉や語句（言葉のひとまとまり）の意味などに関心を高めていったものと思われる。

そこで考えられるのが「学生自身による語彙の量的拡大と語彙力の質的拡大」である。そのためには，十分に時間をかけて個別に取り組むのが最良であることは言うまでもない。しかし，敢えて，こんなサプライズな方法はどうだろうか。すなわち，数人のグループを構成して，グループ全員で語彙を増やしていくのである。学生が持ち前のゲーム感覚で楽しみながら取り組み，場合によっては，グループ間で切磋琢磨しながら互いに語彙を増やしていくのもよい。そして，ゲーム後は，産出された新たな語彙の意味を調べたり，それらを使って文章を作ったりして，最終的には参加者同士で評価し合うのである。

【文献】

1） 井上一郎（2001）語彙力の発達とその育成 ― 国語科学習基本語彙選定の視座から ― 明治図書

2） 萩中奈穂美（2020）「語彙学習力」育成のための実践的研究 ― 表現活動における語彙指導の意義と方法 ―

3） 望月正道（2008）「語彙力」とは何か TEACHING ENGLISH NOW VOL. 11 SPRING 2008

A Practical Study on “Vocabulary Ability” in Education and Childcare

——Toward the actual situation of “Vocabulary ability” and its development——

Kenji KOBAYASHI

Department of Early Childhood Education, Teikyo Junior College

【abstract】

【Purpose】This study aims to grasp the actual situation of “vocabulary ability” of junior college students “2nd grade” write who aspire to became kindergarten teachers and nursery school nursery teachers. The purpose of this study is to investigate effective teaching methods for cultivating. In the study, “vocabulary ability” is defined as having both “number of vocabulary words” and “ability to use vocabulary appropriately”. Regarding the difference between “words” and “vocabularies” in sentences, words that have meanings as words are defined as “words”, and individual words are expressed numerically as “vocabularies.

【Methods】In order to the actual situation of “the number of vocabularies” possessed by students , we conducted a survey of “words they know about education and childcare” at the beginning of the unit. In addition, as a means of instruction to encourage the development of "vocabulary ability", in addition to quizzes, short essays, and reports, self-evaluation of learning was incorporated in the learning process of unit. Furthermore, at the end of the unit, we asked them to write a task composition using the 28 words presented to them, and surveyed “the number of vocabularies they had acquired by the end of the unit” and “the reason for increasing the number of vocabularies”. In addition, the learning situations of the six selected students were summarized and considered.

【Results】Twenty-eight students were surveyed, and all of them possessed 421 vocabularies before learning unit, averaging 16.2 . In addition , 21 students(81%) concentrated on the range of “50 to 80” in terms of the number of words they had learned by the end of the unit. In addition, when asked about the reasons why they increased their vocabulary, there were a variety of responses, such as, “I researched words I didn’t understand and specialized words” in addition, we analyzed and considered the learning situation of 3 students who had remarkable transformation among the 6 students extracted.

【Discussion/Conclusion】The number of vocabularies acquired by the students after studying the unit increased by about four times compared to before the study, and it is presumed that is mainly due to the degree of interest and receptiveness to words and vocabulary. It was not possible to determine that the relationship with academic ability was the greatest factor. In order to increase the vocabulary and foster the development of vocabulary skills, in the learning process of the unit, students should always be motivated and motivated to learn, and encourage divergent thinking based on a solid understanding. It was recognized that it would be effective to take guidance measures such as incorporating evaluation. Furthermore, from the learning situation of the extracted students, those who have acquired standard academic skills (interest, motivation, attitude, comprehension, thinking ability, etc.) and have a rich vocabulary generally have high vocabulary, became clear.

【Key words】word, vocabulary, number of vocabulary words, vocabulary ability, teaching method, self-assessment, academic ability